SJ Interview　SJ インタビュー

大人は子どもの命を守るモデルになっているか 交通場面における幼児の模倣学習の実際を調査

筑波大学 医学医療系 教授　**徳田克己**さん

徳田さんは子ども支援学などを専門とし、子育てや親子関係のあり方について研究している。そして、筑波大学発のベンチャー企業「子ども支援研究所」の所長として、全国各地の幼稚園・保育所等で子どもの教育や保育をサポートする活動も手がけている。長年、子どもやその保護者と接する中で、交通安全教育においては幼稚園・保育所等で教えてもらったことよりも日常一緒にいる親の行動のほうに影響されやすいのではないかと感じていた。

「幼児が交通ルールとマナーに関する知識と行動を最も効果的に身につける方法として、近くにいる保護者の行動を模倣することがあります。そこで、『保護者が子どもの前でどのような交通行動をしているのか』『子どもはどのような行動が適切あるいは不適切であると認識しているのか』を明らかにしたいと考えました」と、徳田さんは交通場面における定点観察調査、保護者に対する質問紙調査、幼児に対するヒアリング調査という３つの方向からアプローチしたのである。

赤信号や点滅信号後の横断は保護者が子どもを先導

交通場面における定点観察調査では、幼児を連れた保護者が子どもと一緒に横断歩道上を信号無視して渡るケース、歩行者用信号機が点滅した後に子どもと一緒に横断を始めたケース、子どもと一緒に歩きながらスマートフォン（ながらスマホ）をしているケースがどの程度あるかを調べた。信号無視と点滅信号後の横断に関しては５ヵ所で実施。結果は表１の通りで、全体で５%の幼児を連れた家族が信号無視をしていた。赤信号や点滅信号後の横断は保護者が子どもを先導しており、点滅信号後に横断を始めた家族では、子どもを中央分離帯に残して大人だけ先に渡ってしまうというケースも確認されたという。

ながらスマホに関しては９ヵ所（大阪市内４ヵ所、神戸市内２ヵ所、東京都内３ヵ所）で実施。全体（1996 家族）の約１割の家族連れが幼児と歩く際に、ながらスマホをしているという結果となった。

保護者は自分一人になると不適切な行動をしてしまう

保護者に対する質問紙調査は、幼児を持つ保護者が子どもと一緒の時および子どもがいない時にどのような交通行動をとっているのか、子どもに不適切な交通行動をまねされた経験があるのかなどについて明らかにしようというものだ。

調査対象者は東京都、北海道、茨城県、千葉県、沖縄県の幼稚園、保育所、こども園に子どもを通わせている保護者 1150 名。承諾を得た施設の保護者に質問紙（無記名・自記式）を配布し、766 名の回答を分析対象とした。

子どもと一緒の場合の交通行動および自分一人の場合の交通行動を「非常によくする（5 点）」から「全くしない（1 点）」までの 5 段階で尋ねている。それぞれの得点の平均値を比較したものが表２である。

「自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する」こと以外は、自分一人の場合には不適切な行動をする頻度が有意に高くなることが確認できた。例えば、「信号がある横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする」については、子どもが一緒の場合には平均値が 4.67 であるにもかかわらず、自分一人の場合には 4.17 に下がっている。

「『自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する』ことは道路交通法に示され、違反した場合には罰則が設けられていることから、子どもがいてもいなくても習慣としてその行動が身についているのでしょう。しかし、それ以外は子どもと一緒の場合であれば『わが子を事故に遭わせたくない』という思いや『子どもの前では適切な行動をしなくてはならない』という規範意識が働き、適切な行動をとろうとするのですが、わが子がいなければ、その思いや規範意識が薄れるようです」。

また、自分が赤信号を渡る姿を子どもに見られた経験の有無を尋ねたところ、35%（271 名）が「ある」と答えている。子どもに見られた経験のある人を対象に、子どもがまねをして赤信号で渡ろうとした経験の有無を「非常によくある」から「全くない」までの４段階で尋ねたところ「非常によくある」「時々ある」と答えた人は 16%いた。さらに、子どもにエスカレーターを歩く姿を見られた経験の有無については 52%（399 名）が「ある」と答え、子どもがまねをした経験が「非常によくある」「時々ある」と答えた人は 46%と約半数を占めた。

「赤信号で渡ってはいけないことは幼稚園・保育所等で教えられているので、保護者が赤信号で渡っている姿を見ても、多くの子どもはしてはいけないと認識していることがうかがえます。しかし、エスカレーターを歩いてはいけないことについて、幼稚園・保育所等で教えられる機会はないと思いますし、このルール自体を認識していない保護者や先生もいます。保護者が歩いていれば、子どもも当然、自分もして良いことだと思ってしまうのです」。

幼児の多くは交通安全に関する知識を持ち合わせている

幼児に対するヒアリング調査では、具体的な交通場面において、どのような行動をすることが適切あるいは不適切であると認識しているのか、幼児に直接尋ねている。調査対象者は東京都内のＡ幼稚園に通う年中男児 14 名、年中女児 14 名、年長男児 10 名、年長女児 13 名の計 51 名（保護者の同意を得た上で実施）。一人ずつ、交通場面で不適切な行動をしている人が描かれたイラストを見せ、不適切な行動をしている人は誰か、その理由は何か、その場面でどのように行動をしたら良いか、自分はこのようなことをしたことがあるかなどを質問する。

最初に例題のイラストで練習をした後、５枚の交通場面のイラストを提示。例えば、右のイラストを見せて、「この絵のように、横断歩道の信号がチカチカしているところを見たことがありますか？」と青信号が点滅した状態での横断であることを意識させ、良くない行動をしている人とその理由を尋ねると、全体の８割の子どもが正解し、年長児のほうが年中児よりも正解する割合が高くなっていたという。、

「不正解の子どもの回答では、青信号が点滅している時に渡ろうとしない人（男子高校生）が良くない行動をしていると回答した子どもがいました。この子どもは、横断歩道を渡ろうとした時に信号が点滅していたら、走って渡るように保護者にいわれていると述べており、保護者の言動で誤った認識を形成したと思われます。正解を答えた子どもに、この男の子はどうすべきであったのかを聞くと、ほとんどの子どもは『渡らずに待つ』『戻って青になるまで待つ』と答えていました」。

青信号が点滅している時に横断歩道を渡った経験があるかを尋ねたところ、半数の子どもが「ある」と答えている。また、子どもから自発的に出た発言では「信号がチカチカしていたら、走って渡るとママがいった」など、母親や父親から点滅信号後に横断を始める際は走って渡るようにいわれていた子どもが目立ち、点滅している状態で保護者や兄姉が渡ろうとしている姿を見ていたことを発言する子どもも多かったと、徳田さんは説明する。

３つの調査を総合的に考えると、保護者は子どもの前ではある程度、交通ルールやマナーを守って生活していると自身では認識していると思われる。しかし、子どもから保護者がルールやマナーを守っていない行動が語られ、実際にもその姿が観察されている。

「大人が守らない姿を見て育てば、知識はあっても交通ルールやマナーを守れない大人に成長することは容易に推測できます。子どもを良き交通社会人として育てるためにも、保護者がモデルとなる適切な交通行動を示すことが大切です」。

※文中の調査結果およびイラストの出典は、平成 30 年度タカタ財団助成研究論文「大人は子どもの命を守るモデルになっているかー交通場面での幼児の模倣学習の実際ー」

表1　信号無視、点滅信号後の横断をした家族の割合

場所	横断した家族数	信号無視	点滅信号後の横断
JR 大正駅前（大阪市）	210	1%（2）	3%（6）
JR 神戸駅前（神戸市）	44	14%（6）	5%（2）
大阪市営地下鉄大阪港駅前（大阪市）	211	2%（4）	18%（37）
JR 天王寺駅前（大阪市）	237	8%（18）	11%（27）
JR 小岩駅前（東京都）	96	9%（9）	21%（20）
計	798	5%（39）	12%（92）

表2　子どもと一緒の場合と自分一人の場合の行動の比較

	子どもと一緒	一人
自動車の助手席に乗る時にシートベルトを着用する	4.90	4.92
信号のない横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする	4.90	4.78
信号がある横断歩道を渡る時に自分が左右の確認をする	4.67	4.17
自動車の後部座席に乗る時にシートベルトを着用する	3.83	3.22
横断歩道を渡る時に自分が手を挙げる	1.93	1.23
渡り始める前に歩行者用信号が点滅していても，渡ってしまう	1.85	2.95
横断歩道が近くにあるにもかかわらず，横断歩道ではないところを横断してしまう	1.79	2.68
道を歩いていて歩きスマホをしてしまう	1.59	2.06
車が来ていなければ，赤信号で横断歩道を渡ってしまう	1.22	1.83
横断歩道を渡っている時に歩きスマホをしてしまう	1.17	1.43
歩行者用信号が青に変わる前に渡り始めてしまう	1.14	1.45